

鳥学ニュース

No.37

1990年11月10日

鳥学会のハガキ

岡田 泰 明

私が鳥学会に入会したのは昭和26年（1951）のことである。その年の10月27日の第119回例会案内のハガキが第1号で、以後約20年間のハガキはだいたい保存してある。例会報告は後日『鳥』（現日本鳥学会誌）にも載るけれども、案内ハガキはそれとはまた別の面白さがあるので捨てきれないのである。

当時ハガキは2円、鳥学会の年会費は200円であった。現在はハガキ41円、年会費5,000円である。

ハガキは約20倍、年会費は25倍になったわけである。

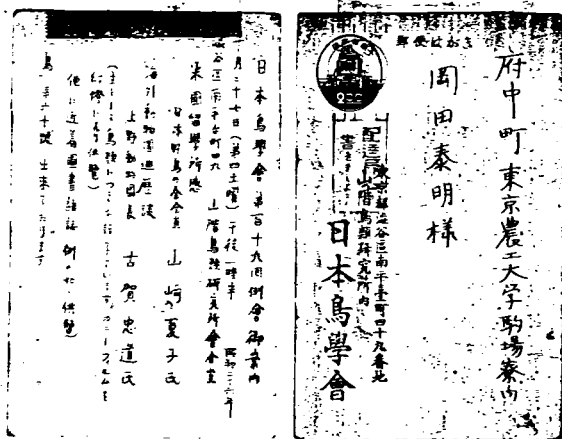
私が入会したころは、故高島春雄氏が世話役で、ハガキのガリ版も氏の筆によるものであった。高島さんは「チョーガッカイ」でなく、「チョウガククワイ」と発音されるほど几帳面な方であったから、ハガキの漢字も略字でなく、律気に旧字を守っておられた。「鳥学会」でなく、「鳥學會」なのであった。

例会の会場はほとんど山階研究所の1階の会合室だった。新入りの私は後ろの方で小さくなくてしたが、前の方には戦前の華族様、即ち齋司信輔公、山階芳麿侯、黒田長礼侯、蜂須賀正氏侯、清棲幸保伯らが居並び、また華族ではないが内田清之助、榎山徳太郎、石沢慈鳥ら、かねて本などで熟知していた著名士が綺羅星の如く顔をそろえていた。今こうして名前を列挙してみると、すでに存命者は1人もおられないのに気付く。

例会の講演はそれほどむづかしいとは感じなかった。学問的な演題よりも、各地の調査や外国旅行談など楽しいものが多く、時には「幻燈」（スライドのこと）が行なわれた。さきに述べたハガキ第1号の演題も、「米因留学所感 山崎夏子氏、海外動物園巡歴談 古賀忠道氏」の2本立てで、後者は「幻燈」付きとなっている。因みに山崎夏子氏とは今の奥田夏子氏（日本女子大名誉教授・日本鳥類保護連盟理事）のことである。

例会は夏場を除いて毎月のようにあったから、世話役の方々は随分苦勞されたらしい。演題も演者もすぐタネ切れになってしまうからである。ハガキにも「飛入演説歓迎」（'51年11月）とか、「出席各位の一人一話お願い」（'52年1月）とか悲鳴に近い文言がある。

面白いのは'52年3月例会の案内である。黒田長礼氏とH. E. McClore氏の講演に続く第3が「鳥類保護連盟のあり方等につき皆様と協議したいと思ひます」。鳥学会の例会で、連盟のことを協議していたのだから、おおらかな時代であった。また'59年2月例会のように「日



日本鳥学会会頭就任にあたって

中 村 司

この度は1990年の鳥学会金沢大会において会頭に選出していただき、身にあまる光栄と存じております。80年の伝統ある鳥学会の名に恥じないよう、前会頭黒田長久博士のあとを継ぎ、学問と人格を見ならっていきたいと思っております。

私は1947年に鳥学会会員になり40年余の鳥の研究のうち、30年を鳥類の渡りに関する生理生態学的研究に費やして参りました。これを契機にそのままをいたしたいと思っております。また、運営面では評議員幹事並びに各種委員会の皆様と協力しながら鳥学会を少しでもレベルアップするよう国際的な感覚をもち、また国内外の鳥団体とも連携しながら努力して参りたいと思っております。



鳥学会年会開催地の拡大とともに会員が年々増え、また若い研究者が益々多く育ってきますことを心から願っております。

(前ページより続き) 本野鳥の会東京支部例会と合同で開催致します」というのもあった。

昔は鳥学会も連盟も野鳥の会も、もっと混然としていたのだ。未分化だったといってしまうばそれまでだが、それなりの良さもあったのである。今は何となくお互いによそよしくなってしまうような気がする。ただ昔も今も、1人でこれらの会のいくつかに入っている人は多い。いやむしろ、そうでない人の方が少ないのではないか。頂上はいくつかあっても裾野は広く一体となっているのである。

鳥界諸団体の中で、唯一鳥学会だけが会員名簿を公けにしている。'89年3月現在の名簿が会誌第37巻4号('89年6月)に載っている。これを見ると氏名の次のカッコ内に西暦年がついている。この説明は特にないがその人の入会年を現わしているのだろう。そこで各年代ごとに人数を調べてみた。(海外、購読会員を除く)

	入会者(人)	構成比(%)
1920年代	3	0.4
30 "	9	1.1
40 "	31	3.9
50 "	58	7.2
60 "	78	9.7
70 "	217	27
80 "	408	50.7
計	(804)	(100)

なんと半分が80年代入会者、70年代と合わせると77.7%にもなる。1989年が3月までの統計だからフルに数えれば確実に8割を越すだろう。鳥学会員の大勢はせいぜいここ20年以内に入会した人たちが占められているのである。因みに私が入会した1951年以前の合計は52人、全体の6.5%に過ぎない。会の先輩がまだ50人もおられるのは心強い、といういい方もできるが、1割未満の枠に入ってしまった淋しさはおおうべくもない。

古いハガキのファイルを眺めていると、時代の流れというものをつくづくと感じる。

Movement

第22回国際行動学会のお知らせ

第22回国際行動学会議が来年の8月22～29日にかけ、京都の大谷大学で開催されます。2年に1回開催されるこの会議は、行動生態学から神経生理学まで、また昆虫から哺乳類まで、動物行動に関するあらゆる分野を対象

にしています。もちろん鳥に関する発表も多く、世界の著名な鳥学者が多数参加する見込みです。興味ある方は12月31日までに下記へ資料を請求して下さい。

〒107 港区赤坂1丁目8-10

第9コーワビル
サイマル・インターナショナル気付
第22回国際行動学会議 事務局

~~~~~ N · E · W · S file ~~~~~

●南極便り(1)

気づいてみると日本を離れてから9カ月になります。自衛艦しらせでのあすか基地、昭和基地への輸送、短い夏期間のペンギン調査をおえ、2月1日に30次隊と越冬交替してから7カ月となり、ようやく越冬生活半ばを越え、ここ昭和基地での生活もある点ではなかなかいいものだと感じられるようになりました。別の世界からの情報はごく限られており、ここにはお盆騒ぎも毎日の通勤ラッシュもありません。人と物の出入りはまったくなく、男ばかり30人の孤立した小世界は、よそから見ると多少異常なのかも知れませんがそれなりに住心地がよいものです。南極観測事業関係以外の公の情報源としては毎日ファクスでダイジェスト版の新聞が送られてきています。近ごろ緊迫したイラク情報が頻繁に伝えられています、どうもピンと来ず、よその宇宙の出来事のように感じられます。こういった、世界情勢の変化は、心理的にはまったくこの小世界に影響をおよぼさないようです。ただ個人的には、新鮮な野菜と科学情報に非常に飢えています。最近の学会の話題が入ってこないが一番さみしいところです。

さて昭和基地は今5月下旬から7月中旬の太陽が顔を出さない“極夜”が明け、日の出8:00、日没17:00と世間並の日周リズムとなり、海水調査旅行や航空機を使った観測など野外行動がさかんになりはじめました。気温は今が一番低く、マイナス40～30度になりますが、今年は海水が発達しており、氷厚が厚いので安心して雪上車を走らせることが出来ます。私自身は1～3月にアデリーペンギンの調査をしたきり冬期間はあちこちの旅

行のサポートや車輛整備の手伝い(といってもしろうとなのでたいして役にも立ちませんが)をしていましたが、8月下旬には9月に予定しているコウテイペンギンの調査のためのルート工作に出かけてきました。昭和基地からみて西、リュツォホルム湾の対岸、直線距離にして200kmのところの定着氷縁にコウテイの数千ペアの繁殖コロニーが知られています。このコロニーは航空機から確認されているだけでいままでも誰も足を踏み入れたことがありません。今回の偵察ではコロニーまであと10数kmと近づいたのですが、氷山群のなかによいルートを発見できず、そこにたどり着くことはできませんでした。コウテイの生態はフランスやオーストラリアの観測隊が明らかにしつつあり、今更の感もありますが、9月には体重30kgをこすコウテイの数千ペアのコロニーをぜひ見たいものです。

(綿貫 豊)

●ケンブリッジから

6月の中旬から10月までの予定で、ケンブリッジのBritish Antarctic Survey (BAS)でVisiting Scientistとして仕事をしています。これは日本の国立極地研究所とBASの間の共同研究が行われている関係で、昨年はBASのDr. Croxallが来日し、今年には私がイギリスで仕事をすることができるようになったものです。私の仕事は、亜南極のサウスジョージア諸島バード島で繁殖しているゼンツーペンギン、マカロニペンギン、アオメウの潜水記録の解析と餌サンプルの解析です。

BASでは約400人の人が働いており、その約半分が研究者です。研究系は地学、地球

物理、雪氷及び気象、超高層、海洋生物、陸上及び陸生生物の6部門に分かれており、私は海洋生物部門の中のBird + Seal Section に属しています。海鳥の研究は、南極海洋生態系の中の高次捕食者として、主に繁殖、採食生態、潜水行動などが行われています。

ここでは生物学的な研究をするだけでなく、たとえば環境モニターとしてペンギンを使う方法を示したり、センサスの結果から保護の必要性を訴えるなどといった、南極の自然環境の保護にも力をいれているという印象を受けています。

仕事はよく細分化されており、コンピューター、生物統計、図を書く専門の人などもあります。また、数週間～数年間といった期限付きで仕事をしている人も結構多くいます。これはBASに限ったことではなく、大学を卒業してすぐ就職するという事はむしろ珍しいことで、次々に自分の参加したい研究のプロジェクトを見つけて、経験を積んでいくというのが一般的なためようです。他にイギリスの内外からPhD(博士学位を取得)の研究をするためにBASにきている学生もいます。

ケンブリッジは古いカレッジの建物と緑と

自転車の多い町です。夏の間は観光客と語学研修にやってきた人々で実際にぎやかでしたが、9月をすぎたころから、学生が長い休みを終えて帰りはじめ、もとの静かな町に戻ることです。(加藤 明子)

●山口県版鳥類繁殖地図報告書の発行

鳥学ニュース634で作成中としておりました上記の報告書を発行致しました。

価格、内容が一部変更になりましたのでお知らせ致します。

価格は送料込みで2000円。本文337頁。写真16頁95枚。調査範囲 山口県全域及び北部九州。(島根、広島県の一部を含む。)繁殖分布図(157種)及び解説、具体的繁殖例/生息密度図(118種)/調査地点標高分布表、環境要素比率分布表、鳥類別観察コード頻度/山口県繁殖関係文献一覧及び概説/調査に伴う興味ある観察(ケリの繁殖。バン幼鳥のヘルパー行動他短報14編)/報文(人工建造物で営巣する野鳥20種、カワガラスの巣箱利用による繁殖他4編等

申し込みは下記まで。

(〒745) 山口県徳山市栗屋坂田948-24

(電話) 0834-25-4469 (小林 繁樹)

鳥学ニュース発行一覧 No.1~37 (1975~90年)

誌名	号数	発行年月日 (西暦)	頁数	誌名	号数	発行年月日 (西暦)	頁数
鳥学会ニュース	1	75. 12. 29	2	鳥学ニュース	20	86. 8. 20	10
日本鳥学会ニュース	2	76. 10. 15	4		21	86. 11. 25	10
	3	77. 3. 10	2		22	87. 2. 28	10
	4	77. 6. 15	2		23	87. 5. 1	8
	5	77. 12. 20	3		24	87. 8. 20	8
	6	79. 3. 20	3		25	87. 12. 15	8
	7	79. 9. 30	8		26	88. 2. 29	12
	8	80. 10. 30	8		27	88. 5. 31	10
	9	81. 11. 30	8		28	88. 8. 1	8
	10	83. 2. 1	8		29	88. 11. 25	8
鳥学ニュース	11	83. 7. 15	8		30	89. 2. 25	12
	12	83. 12. 5	10		31	89. 6. 10	8
	13	84. 3. 15	8		32	89. 8. 10	8
	14	84. 6. 5	10		33	89. 11. 15	12
	15	84. 12. 1	14		34	90. 2. 28	10
	16	85. 4. 1	10		35	90. 6. 10	12
	17	85. 6. 20	8		36	90. 8. 1	8
	18	85. 12. 5	10		37	90. 11. 5	10
	19	86. 5. 10	10				

鳥学ニュース 総目次 No. 1 ~ 37 (1975~90年)

【巻頭言】

- グループ活動について (黒田長久) 11-1
 海鳥を見る楽しみ (中村登流) 12-1
 図鑑の鳥の絵は左向き、右向き?
 (森岡弘之) 13-1
 半世紀前のアホウドリ足環標識(表題を左記に変更)
 (山田信夫) 14-1~2
 トキのニュースを聞きながら (中川志郎) 17-1
 私の鳥声録音とその分析研究
 (浦谷鶴彦) 18-1~2
 初めての論文 (中村司) 19-1
 鳥獣保護法運用のありかた (風間辰夫) 20-1
 草創期の日本野鳥生態映画(松山資郎) 21-1~2
 野鳥映画について一提言 (川田潤) 22-1
 イギリスの古本屋あれこれ(森岡弘之) 23-1~2
 機器使用による鳥の行動観察
 (中村浩志) 24-1~2
 大会雑感、その将来に向かって(黒田長久) 25-1
 試行錯誤を重ねた京都鴨川でのユリカモメの餌づけ
 (大槻史郎) 27-1~2
 グループ研究によせて (浜口哲一) 28-1
 鳥学の国際化 (山岸哲) 30-1~2
 米国の鳥類研究者就職事情 (樋口広芳) 32-1
 最近の鳥類標識調査事情 (吉井正) 33-1
 北の鳥人たち (藤巻裕蔵) 34-1
 2つの話題 (加藤昌宏) 35-1~2
 流水の鳥 オオワシ (大野義輝) 36-1~2
 鳥学会のハガキ (岡田泰明) 37-1~2

【特集】

- 極東の鳥 11-2~6
 極東鳥類研究会の活動(藤巻裕蔵) ソ連邦の鳥類
 に関する図書・文献案内(長谷川博) <世界の鳥
 学者・1> V. A. ネチャエフ博士のこと(藤巻)
 日ソ渡り鳥条約のその後(吉井正) トビックス・
 ソ連鳥学者の訪日(竹下信雄)
 海鳥 12-2~6
 「日本海鳥グループ」発足する 海外の「海鳥グル
 ープ」について 海鳥についての図書・文献の簡単
 な紹介(以上長谷川博) <世界の鳥学者・2> W. R.
 P. Bourne 博士(黒田長久)
 地方鳥類誌 13-2~5
 都道府県別出版目録(川内博)
 マーキング法の工夫 14-2~6
 1. 細くて丈夫なカラーリング 2. 簡単に自作で
 きるカラーリング 3. 羽毛の染色(以上福田道雄)

4. 尾羽の一部をカットする(中川富男) 5. 羽軸
 に異なる色の羽をさし込む法(中村浩志) 6. 反射
 テープの利用-アオバズク(大庭照代) 7. 同-タ
 マシギ(米田重玄) 8. アカゲラにつけた肩タグ
 (石田健) 9. 番号入り色足環-アホウドリ(長谷
 川博) 10. ラジオテレメトリー(米田) 11. カワガ
 ラスのマーキング(江口和洋) 12. ガン類のマーキ
 ング(呉地正行) 13. ユリカモメへのマーキング
 (須川恒・大槻史郎) 鳴き声パターンによるカ
 コウの個体識別(百瀬浩・中村)
 <世界の鳥学者・3> ドナルド・S・ファーナー教授
 (中村司) 14-7
 調査・観察の小道具集(1) 15-2~5
 1. 便利な二連カウンター(呉地正行) 2. 巢のの
 ぞき鏡(長谷川博) 3. ペースメーカー機能付腕時
 計(石田健) [双眼鏡] 1. 双眼鏡の使い分け(樋
 口広芳) 2. 焦点調節不要の双眼鏡(福田道雄)
 3. 近距離用双眼鏡(長谷川政美) 4. 防水型双眼
 鏡(花輪伸一) 5. 気密防水型双眼鏡(石田) 6.
 胸ポケットに入る単眼鏡(川内博) <前号追記>
 調査・観察の小道具集(2) 16-2~4
 野帳【フィールド・ノート】(長谷川博) 耐水性
 ノート(竹下信雄) [測定器] 1. スイス製バネ秤
 -ベソラ(茂田良光) 2. 銀秤(長谷川) 3. 距離
 や面積の測定(福田道雄・杉森文夫)
 調査・研究のための助成金獲得法 17-2~5
 (福田道雄) <助成例> 日本自転車振興会助成(杉
 森文夫) WWF保護事業助成(福田) トヨタ財
 団「身近な環境をみつめよう」研究コンクール(唐
 沢孝一)
 鳥声録音法、分析法、サウンド・ライブラリー
 の小案内 18-2~5
 1. 録音機材・録音方法について(百瀬浩) 2. 分
 析法 1) ソノグラム(長谷川博) 2) コンピュ
 ーターによる音声の分析について(百瀬) 3) パ
 ソコンによる音声の分析(高良真一) 4) 音声合
 成装置について(松岡茂) 3. サウンド・ライブラ
 リー 1) 日本 2) 外国 4. ディスコグラフィ
 - (長谷川)
 論文のまとめ方 19-2~6
 (百瀬浩) / 論文を書くうえで苦勞したこと(伊藤
 信義) 論文を書く前に(上田恵介) 参考文献の探し
 方、集め方(浦野栄一郎) 修正を要求された時の対
 応(山岸哲) 「論文の書き方」文献案内(浦野)
 各種の許可申請と届け出 20-2~4
 1. 天然記念物の現状変更(学術調査)に必要な許
 可手続きへのアドバイス(花井正光) 2. 鳥獣捕獲
 ・鳥類卵採取許可の申請(長谷川博) 3. 特殊鳥類

の保護、収容等の届け出	4. 標識鳥の回収報告と足環の届け出	
映像記録(1)	21-2~6	
ビデオ・バードウォッチング(津戸英守)		
16mm撮影の実際(久保田義久)	フクロウは食後何時間でペリットを吐くか(阿部學)	
映像記録(2)	22-2~5	
続・草創期の日本野鳥生態映画(松山資郎)	学研製作による鳥の映画(岡田泰明)	テレビ番組・16mmフィルム・ビデオで見られる鳥の生態(川内博)
外国出版物購入法	23-2~7	
I 洋書輸入通信販売を利用する	II 個人で輸入する(以上長谷川博)	III 外国出版物購入の経験と気をつけたいこと
外国から直接書籍を取り寄せるには(森岡弘之)	私の洋書購入法(綿貫豊・渡辺央・茂田良光・磯部清一)	
機器使用行動解析技術	24-2~5	
1. ラジオテレメトリーによる鳥の行動解析		
2. アクトグラムによる行動解析		
3. 自動撮影による行動観察(以上中村浩志)		
最近の鳥学会大会(1)	25-2~5	
(長谷川博・小笠原暁・林俊夫・鶴見みや古・湯本光子・山崎亨・中島欣也・山田律雄・原戸鉄二郎・和田岳・小藤弘美・武下雅文・大田保文)		
最近の鳥学会大会(2)	26-1~6	
最近の鳥学会風景	最近の鳥学会大会一覧表(黒田長久・川内博)	舞台裏からみた最近の鳥学会大会(川内)
<前号への追記(長谷川博)>	日本鳥学会1987年大会をお引受けして(中村司)	ドイツ鳥学会の大会(長谷川)
失敗に学ぶ-経験雑記帳	27-2~5	
1. 標識調査のためのガン捕獲(呉地正行)		
2. 卵の破損防止法(尾崎清明)		
3. 小鳥の卵に印をつける方法(長谷川博)		
4. ヘビにセッカを取られた話(上田恵介)		
5. 網にかかったシジュウカラをモズに殺された(石田健)		
6. アオゲラの巣放棄(石田)		
7. コゲラの雌飛び出し(石田)		
8. 巢内のひなに足環づけをする日齢(長谷川)		
9. カラーリング選びは慎重に(福田道雄)		
10. 三脚のかわりに「まくら」を(長谷川)		
11. シリカゲルの利用(長谷川)		
12. コンピュータの生データを失う(石田)		
鳥類研究グループ(1)	28-2~5	
日本白鳥の会	極東鳥類研究会	雁を保護する会
鳥害研究会	日本鳥類標識協会	カワウ標識調査グループ
都市鳥研究会	ねぐら研究会	梓川鳥類生態研究グループ
上越鳥の会	台湾の鳥友の会	日本イヌワシ研究会
日本鳥学会近畿地区懇談会		
鳥類研究グループ(2)	29-1~3	
いろいろな顔をもった研究グループの機関誌	棉化鳥類研究会	相模川河口野鳥研究グループ
山梨動物生態研究会	北陸鳥学懇談会	
第1回国際鳥学セミナー	30-2~7	
大阪ワークショップの報告(山岸哲)	ワークショップに参加して(浦野栄一郎)	【公開講演会】京都(江崎保男)東京・札幌 Douglas W. Mock教授の略歴
モック教授との一問一答(長谷川博)	通訳をしながら(大庭照代)	
鳥類研究グループ(3)	沖縄野鳥研究会	30-8
飛び立つ(1)	31-1~3	
アホウドリ(長谷川博)	長かった浪人の日々(上田恵介)	南極でアデリーペンギンを(綿貫豊)
「演習林」で何ができるか・・・(石田健)		
飛び立つ(2)	32-2~3	
野外生物学の根拠地からのご挨拶(大庭照代)		
九州から北海道へ(川路則友)	就職のご報告(江崎保男)	
バンディング講習会	33-2~5	
10年間の成果(佐藤文男)	講習会こぼれ話「これが講習会だ!」(山階鳥研標識研究室)	
北海道では今!-鳥類研究最前線①	34-2~6	
私の研究テーマ(川辺百樹)	私のフィールド・釧路湿原(橋本正雄)	タンチョウの標識(近藤憲久)
知床をフィールドにして(中川元)	鳥とのつきあい(飯嶋良朗)	私とフクロウ(山本純郎)
私の利尻、そして鳥(小杉和樹)	巣箱とビデオカメラとシマフクロウ(早矢仕有子)	野生生物保護行政に携わって(梅木賢俊)
続・地方鳥類誌	35-2~4	
都道府県別出版目録(川内博)		
飛び立つ(3)	36-3~4	
みんなでつくばをかき回そう!(藤岡正博)		
3年目をむかえて(東條一史)		
【Discussion】		
評議員選挙について	(森岡弘之)	7-2~5
大会における研究発表を考える(松岡茂)	7-5~7	
絶滅に瀕している佐渡の朱鷺について放言	(伊藤貞)	8-3~4
会誌名称の変更を検討	(長谷川博)	15-9
大会プログラムの事前送付を(浦野栄一郎)	16-6	
ニュース16号の二つの記事に反論する	(森岡弘之)	17-5
鳥学会会員に対するアンケートの結果について	(百瀬浩)	18-7
鳥学会1986大会を終えて	(長谷川博)	21-6
鳥獣捕獲許可申請にかかわる長谷川氏の一文に寄せて	(樋口広芳)	22-6
意見に答えて	(長谷川博)	22-6~7

米国の鳥類研究者就職事情を読んで
 (森岡弘之) 34-7
 米国の鳥類研究者就職事情に関する森岡氏の意見に
 寄せて (樋口広芳) 35-5
 米国における学生の地位と森岡氏の記事への補足
 (篠岡正博) 35-5~6
 英国の鳥類研究者就職事情 (大庭照代) 35-6

【本会関係集会の案内】

〔大〕：大会・総会 〔シ〕：シンポジウム
 〔例〕：例会 〔講〕：講演会
 〔ポ〕：ポスター発表会

〔例〕 1976年1月24日 1-2
 〔大〕 総会のお知らせ(昭和52年度) 4-1
 〔例〕 1977年6月25日 4-1
 〔例〕 1980年11月29日 8-1
 〔大〕 昭和57年度大会のお知らせ 9-1
 〔シ〕 ハクセキレイとセグロセキレイの進化史にせ
 まる-1983年度大会へのお誘い 11-7
 〔例〕 1983年12月17日・84年2月18日・3月17日
 12-9~10
 〔例〕 1984年5月26日 13-8
 〔例〕 1984年10月27日 14-10
 〔例〕 1985年1月12日・2月23日 15-14
 〔例〕 1985年5月18日 16-10
 〔例〕 1985年9月28日 17-8
 〔大〕 千葉で会いましょう-1986年度大会の案内
 19-9
 〔例〕 1986年11月15日 20-7
 〔シ〕 都市に適応した鳥類について大いに語ろう-
 1986年度大会シンポジウムへのお誘い 20-9
 〔例〕 1986年12月13日 21-10
 〔シ〕 今、なぜキツツキが街中に進出してきたのか
 23-8
 〔大〕 日本鳥学会1987年度大会 甲府へぜひ 24-8
 〔講〕 第1回国際鳥学セミナーのお知らせ 26-12
 〔セ〕 第1回国際鳥学セミナーの予告
 (森岡弘之・山岸哲) 27-6
 〔シ〕 「カッコウと宿主の相互進化」に関するシンポ
 ジウムのお知らせ 27-6
 〔大〕 我孫子でお会いしましょう-1988年度鳥学会大会
 27-10
 〔大〕 '88年大会事務局からのお知らせ 28-7
 〔講〕 Mock教授の公開講演会のお知らせ 28-8
 〔シ〕 トキの増殖とその保護-今後の課題 29-8
 〔大〕 1989年度大会の実施要領について 30-11
 〔大〕 1989年度大会のご案内 31-7
 〔シ〕 托卵鳥と宿主の相互進化 32-8

〔講〕 カムチャツカ半島におけるガンカモ類とシギ
 ・チドリ類の渡りについて 33-10
 〔シ〕 セキレイ3種の社会構造の比較 33-10
 〔ポ〕 ポスター発表会および忘年会のお知らせ
 33-11
 〔シ〕 都会の鳥たちの夜 33-11
 〔大〕 日本鳥学会1990年度大会告知 35-11
 〔シ〕 スズメとハトの生態 36-8
 〔シ〕 鳥の音声とその利用 36-8
 〔シ〕 ツルの行動と社会 36-8
 〔大〕 集会「明日の鳥学ニュースを考える」 36-8
 〔シ〕 ハシブトガラスの生息環境の違いによる
 生態の比較 37-10
 〔ポ〕 ポスター展示と懇親会 37-10

【本会関係集会の報告】

〔例〕 最近1年間の例会報告 6-2
 〔大〕 56年大会に参加して(大庭照代) 9-4~5
 〔大〕 日本鳥学会70周年(仙台)大会を終えて
 (呉地正行) 10-1~3
 〔大〕 仙台大会・エキスカッションに参加して
 (木内エツ子) 10-3
 〔講〕 記念講演会のことなど
 (竹下信雄) 10-4~6
 〔大〕 日本鳥学会1983年度大会終わる 12-1
 〔例〕 1983年4月23日、9月10日(石田健) 12-7
 〔例〕 同12月17日 (石田) 13-7
 〔例〕 84年2月18日 (石田) 14-8~9
 〔大〕 三重大会終わる (長谷川博) 15-1
 〔例〕 同3月17日 (竹下) 15-13
 〔例〕 同5月26日 (石田) 16-9
 〔例〕 同10月27日・85年1月12日
 (石田) 17-6~7
 〔大〕 長野大会を終えて (中村浩志) 18-6
 〔大〕 長野大会バンザイ (竹下) 18-7
 〔例〕 85年2月23日・5月18日 (石田) 18-9
 〔シ〕 「カッコウと宿主の相互進化」シンポジウム
 報告 (樋口広芳・中村) 29-7
 〔大〕 昭和最後の日本鳥学会大会報告
 (杉森文夫) 31-5~6
 〔大〕 1989年度日本鳥学会大会をふりかえって
 (森岡弘之) 33-6~7
 〔シ〕 第2回津戸基金によるシンポジウムの報告
 (大迫義人) 35-8~9
 〔講〕 幻に終わったガラスモフ博士の東京講演会
 (呉地正行) 35-9
 〔ポ〕 ポスター発表会兼忘年会の報告
 (上田恵介) 35-9

【 Movement 】

鳥学会の近畿地区懇談会	(山岸哲) 6-2~3
国際鳥学会第1回告知	8-1
求む鳥の声、イギリスから	(竹下信雄) 8-2
日本鳥学会近畿地区懇談会の近況	(山岸) 8-3
鳥害研究室の発足にあたって	(松岡茂) 8-4~6
第1回鳥類談話会を開催	(藤巻裕蔵) 9-2
ハンガリーの雁シンポジュームの記	(横田義雄・呉地正行・大津真理子) 9-5~7
「極東鳥類研究会」発足	(藤巻) 10-4
第1回モズシンポジウムを開催	(唐沢孝一) 10-6
第2回鳥類談話会の開催	(藤巻) 10-7
日本鳥学会近畿地区懇談会近況	(江崎保男) 11-6
海外シンポジウムのお知らせ	(長谷川博) 12-6
鳥屋のみた動物行動学会	(上田恵介) 13-6
鳥学会近畿地区懇談会近況	(上田) 14-8
第3回鳥類懇談会の報告	(藤巻) 14-8
山階鳥類研究所 我孫子に移転	(長谷川) 15-5
山階芳廬所長との会見記	(長谷川) 15-5~6
第4回鳥類懇談会の報告	(藤巻) 15-6
第19回国際鳥学会議について	16-1
近畿地区懇談会-1984年の例会報告-	(上田) 16-4~5
日本鳥類標識協会創立される!	(茂田良光) 19-7
近畿地区懇談会1985年度活動報告	(山岸・上田) 19-7~8
第20回国際鳥学会議の開催国はニュージーランドへ	(森岡弘之) 20-4
第19回国際鳥学会議印象記	(江崎) 20-5~6
鳥学会近畿地区懇談会が10周年記念講演会を開催予定	(坂根隆治) 23-8
鳥害研究会へのおさそい	(松岡茂) 25-6
第20回国際行動学会議(IEC)印象記	(上田) 25-6~7
国際ペンギン研究会のお知らせ	(正富宏之) 26-7
ワシタカ類のシンポジウムのお知らせ	26-7
アメリカの大学教育の中での鳥類学	(樋口広芳) 26-7~8
第20回国際鳥学会議のプログラムほぼ決まる	27-7
学術シンポジウム「三宅島の自然と環境」案内	27-7
XIX Congress of International Union of Game Biologists の予告	27-7
近畿地区懇談会近況	(坂根) 27-7
「学術シンポ・三宅島の自然と環境」に参加して	(石田) 28-7
托卵に関する情報提供のお願い	29-7
スウェーデンでキツツキ・シンポジウム開催	(石田) 32-6

グラスモフ博士を迎えての講演会と第6回ガン

シンポジウムのお知らせ	(呉地正行) 32-7
国際千鶴シンポジウム-1989名古屋	(竹下) 33-7~8
鳥学会(員)近畿地区懇談会の近況	(浦野栄一郎) 36-4
第22回国際行動学会のお知らせ	37-3

【 会員の投稿コーナー 】

BIRD N・E・W・S	15-7
読者の情報コーナー	15-8
BIRD N・E・W・S	16-5
読者の情報コーナー	16-6
BIRD N・E・W・S	18-8
読者の情報コーナー	19-8
BIRD N・E・W・S	21-7~8
読者の情報コーナー	21-9
BIRD FILE	22-7~8
読者の情報コーナー	22-8~9
BIRD FILE	23-7
BIRD FILE	24-6
読者の情報コーナー	24-6~7
読者の情報コーナー	26-9~10
BIRD FILE	27-9
BIRD N・E・W・S	(中国東北地方の鳥類近況) 29-4~5
BIRD N・E・W・S	(中国西北部および北京の鳥類近況) 31-4~5
BIRD N・E・W・S	(中国南部および上海の鳥相近況) 32-4~5
読者の情報コーナー	33-8
N・E・W・S file	34-7~9
N・E・W・S file	35-7~8
N・E・W・S file	36-5
N・E・W・S file	37-3~4

【 研究室紹介 】

1. 上越教育大学中村研究室 (中村登流) 26-9
2. 大阪市立大学理学部動物社会学研究室 (山岸哲) 27-8
3. 東邦大学理学部海洋生物学研究室 (長谷川博) 28-6
4. 帯広畜産大学野生動物管理学講座 (藤巻裕蔵) 29-6
5. 農林水産省農業研究センター鳥害研究室 (松岡茂) 30-10
6. 森林総合研究所東北支所鳥獣研究室 (由井正敏) 33-9

7. 秋田大学教育学部生物学研究室
 (小笠原暁) 34-9
 8. 愛媛大学農学部生物環境保全学大講座
 (立川涼) 35-10
 9. 北海道大学水産学部附属北洋水産研究施設
 「海洋生態学部門」 (小城春雄) 36-6

【雑記】 (抜粋)

評議員会の報告	1-1~2
本会関係の出版物	1-2
鳥バックナンバー	2-1~2
外国交換雑誌[交換文献リスト]	2-3~4
評議員会の報告	3-1
新役員決まる	4-1
日本鳥学会の現状について	5-1~2
第17回国際鳥学会議出席旅行のご案内	5-3
新幹事決まる	6-1
黒田基金の設定	6-1~2
「南千島の鳥類」刊行について	6-3
黒田長久著「富士山地域の鳥類」	6-3
日本鳥学会の新評議員・役員	7-1
維持会員募集	8-6
幹事の一部変更	8-6
各種小委員会の新設	8-6
鳥の制限ページ	8-7
ご挨拶 (黒田長久)	9-1
学会創立70周年記念行事	9-2
会費改定についてお知らせ	9-2~4
日本生命財団の助成金	9-8
新刊外国図書紹介	9-8
鳥学会各賞の種類と選考方法	10-7
評議員および監事選挙結果	11-8
岡董高氏「イヌワシ」の絵が入選	12-6
例会通知方法の変更について	12-6
学会・関係団体地図 (竹下信雄)	12-8~9
自然保護活動へ資金助成	13-6~7
鳥学会ニュースの再出発について (森岡弘之)	13-7
地方鳥類誌リスト作成協力者 (川内博)	14-9
国会図書館への納本のすすめ (川内)	14-9
幹事の分担変更	14-10
環境庁長官への要望書	15-9
新しい編集態勢について	15-10~11
日本学術会議の新会員選出制度にともなう学会登録	15-11
外国交換雑誌について	15-12~13
ある日の幹事会 (竹下)	16-1
ICBPの専門書 鳥類写真エイジェンシー	16-7
'83年度鳥学会大会シンポジウムの資料	16-8~9

海外鳥学論文のコピー申し込みについて	16-9
評議員・幹事選挙結果について	16-10
続・ICBPの専門書	17-6
日本鳥学会の刊行物出版計画について	17-6
広告掲載と名簿使用のご注意	17-8
「日本鳥類目録第6版」作成のための資料収集に ご協力を! (藤巻)	18-8~9
会費納入に関する会則変更	18-10
会誌名の変更・原稿募集	19-6
続々・ICBPの専門書	19-8
日本鳥学会誌の別刷代金について	20-6
国際鳥類保護会議(ICBP)から出版される 専門書の取り扱いについて	20-7
キツキのカラーライドを集めています	20-7
総会で三宅島問題決議 (竹下)	21-8
英文論文の投稿者へのお願い	22-9
鳥類研究グループリスト作りにご協力下さい	22-9
日本鳥学会評議員・監事選挙結果について	22-10
研究助成の募集	23-8
津戸英守基金のお報せ	24-7
新しい「会費納入状況のお知らせ」	24-8
伊藤基金と津戸基金のお知らせ	25-8
津戸基金によるシンポジウムの公募	25-8
「日本鳥類目録改訂6版」の編集	26-10
文献リストをお送り下さい	26-10
宛名ラベルについて	27-10
論文の引用度 (上田恵介)	29-3
鳥類目録分布資料収集協力者のお願い	29-5
鳥学用語集の編集について	29-5
オロロン鳥の研究に取り組む人はいませんか	30-8
今年度大会委員(ボランティア)公募	30-12
評議員・監事選挙結果について	30-12
補助金の公募	31-8
続・地方鳥類誌作成にご協力下さい!!	32-6
公募 国際鳥学会議への参加助成	32-6
普通会費を5千円に改定	33-12
監事の選出方法の改訂について	33-12
津戸基金によるシンポジウムの公募	34-10
第20回国際鳥学会議に出席を考えている方へ	34-10
新編集委員	34-10
会頭を辞任するにあたって (黒田)	35-2
ニュースレターのレベルアップを	35-12
黒田会頭の辞任	35-12
幹事・委員の人事異動	35-12
国際鳥学会議参加補助金受領者	35-12
編集幹事からのお願い (斎藤隆史)	36-2~3
日本鳥学会会頭就任にあたって (中村司)	37-2
鳥学ニュース発行一覧	37-4
鳥学ニュース総目次(No.1~37)	37-5~9
会頭・副会頭の選出	37-10

シンポジウムとポスター展示会のご案内

第3回日本鳥学会津戸基金シンポジウム

テーマ ハシブトガラスの生息環境の違いによる生態の比較

—ハシブトガラスは都市進出によっていかに変わったか—

日時：1990年11月18日(日) 10時30分～16時

場所：立教大学8号館1階8101教室

1. (10:30～11:15) ハシブトガラスとハシブトガラスの巣立ち後の若鳥の移動と分散：藤森斉
2. (11:15～11:55) ハシブトガラスの繁殖期のなわばり行動：中村理恵
3. (13:20～14:00) 都市生活者としてのハシブトガラス：唐沢孝一
4. (14:00～14:50) 都市緑地にすむハシブトガラスの生態：福田道雄

連絡先：〒110 台東区上野公園9-83 上野動物園飼育課 福田道雄

Tel 03(828)5171〔内線274〕

ポスター展示および懇親会(忘年会)

昨年に引き続き、今年もポスター展示と懇親を合わせた忘年会を立教大学で開催します。金沢大会で発表ができなかった方は、ぜひポスター展示をお願いします。懇親会では昨年好評であったポトラック(持ち寄り)形式で行います。ビール・ジュース類は準備しますので、手作りの料理などお持ち下さい。

日時：1990年12月22日(土) 15～20時 場所：立教大学12号館(2階)

参加申込み：ハガキに住所・氏名・電話・ポスター展示の有無・料理の持ち寄りの有無。

〒171 豊島区西池袋3 立教大学・一般・生物 上田恵介宛(12月15日までに)

Tel. 03(985)2596

懇親会費：料理を持参いただける方；500円、無しの方；1500円

【会頭・副会頭の選出】

1990年10月12日に開催された評議員会で、中村司副会頭兼会頭代理を、投票によって正式に会頭として選出した。それに伴い、空席になった副会頭職に正富宏之氏が選出され、翌日の総会でいずれも承認された。(庶務幹事)

鳥学ニュース No.37

1990年11月10日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒169) 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599
(電話) 03(364)2311

発行人 中村 司 編集者 川内 博・上田恵介 印刷所 文英社印刷